

「ただいま、おばあちゃん」

【あらまし】

私は、祖母に愛されて育った。小学生の時、先生に反発して、クラスメイトをいじめたり「学級崩壊」を引き起こしたりした。両親にも反発した。しかし、祖母の家に遊びに行った時だけは、愛情に包まれて素直な孫になることができた。愛してくれた人には、素直になれる。

大学二年で海外留学し、帰国した翌日、最愛の祖母が亡くなった。今は、祖母の言葉を思い出しながら生きている。

●小見出し

「恵子は強い子だから大丈夫」

幼かったころ

新しい生活

二度目の、新しい生活

反抗期

祖母の言葉

変化

大学入学

最後の姿、最後の声

祖母の死

祖母の最後の優しさ

最後に

「恵子は強い子だから大丈夫」

祖母は、病床で何度もその言葉を繰り返して、息をひきとつた。二〇〇八年、三月のことだ。祖母は第二の母のような存在であり、最愛の人だった。不運なことに、私は祖母の最期を看取ることができなかった。病に倒れていることすら知らなかった。私が留学先のアメリカから帰国したのは、祖母の死の二十日後のことだ。

祖母の死を乗り越えることは、容易ではなかった。祖母の死を知った後、私の世界は闇となり、自分の存在の意味や、追いかけていた夢を見失った。そして自分の無力さに、ただただ呆然としていた。

祖母の死から、一年と四か月。いまだに、祖母のことを思うと、涙が溢れてくる。ただ、一年前に闇の中で流した涙と、今の涙には違いがある。暗闇から抜け出すまでの葛藤、そして、周りの人がしてくれたことを、今、自分のエッセイとして書いてみようと思う。このエッセイが、辛く悲しい祖母の死を乗り越えていくための指針となれば嬉しい。

幼かったころ

私は、両親と弟の四人で暮らしている。両親が結婚し、私が小学校三年生になるまで、H区の高田にあるアパートに住んでいた。同じアパートの十階には、母方の祖父と祖母、叔母が三人で暮らしており、私と弟は、幼稚園に通っていたころから、祖母の部屋によく出入りしていた。幼稚園や

小学校から帰ってくると、いったん家に帰り、その後すぐ祖母の家に向かい、おやつを食べるとというのが習慣だった。母は、

「甘いものばかり食べちゃダメよ」と言つて、あまりおやつをくれなかったが、祖母は母に内緒で、アイスクリームや駄菓子などをたくさんくれた。私と弟は、祖母の家に行くのが、楽しみでしかたなかった。

私と弟が喧嘩をして、お互い手を出すと、「恵ちゃん、お姉ちゃんだから、叩いちゃダメでしょ」と祖母が叱ってくれた。母や父に怒られても、へっちゃらな顔をしていた私だったが、祖母に言われると、とてもこたえた。胸の奥がきゆうつとなつて、いけないことをしてしまったのだと、反省した。

私が小学二年生になると、母がパートを始め、私と弟は祖母の家に行くことが多くなった。母が帰ってくる午後六時までにお腹がすいてしまい、いつも祖母が作った夕飯を食べていた。祖母は料理上手で、特に井料理は絶品だ。私は、親子丼が一番好きだった。ご飯を食べながら、その日に学校であつたことを祖母に話すと、祖母はいつも笑顔で聞いてくれた。

両親も、祖母や祖父と仲が良く、お花見や夏まつりには、よく六人で行つた。母方の兄弟とも交流があり、お盆やお正月になると、総勢二十名での大宴会が行われた。祖母は賑やかなことが大好きだった。お盆やお正月は、祖母の幸

せそうな顔が見られるので、いつも以上に楽しかった。

祖父はタクシーの運転手だ。私が十階の部屋に行く時は、仕事に出かけていることが多かったので、祖父と話した記憶はあまりない。けれど私は、祖父のずつしりとした存在感が好きだった。祖父と祖母はよく口喧嘩をしていたが、怖くはなかった。喧嘩が始まると、私と弟は顔を見合わせ、「またはじまったね」と笑った。本当に温かく、幸せな幼少時代だった。

小学校三年生になったある日、「パパのおじいちゃん、おばあちゃんと、K市のお家で暮すことになったよ」と父が言った。父方の祖父と祖母が、K市に新しく家を建てたのだ。それを機に、私たち四人と、父方の祖父と祖母との同居生活を始めることになった。学校やピアノ教室での友達と離れ離れになることは、とても悲しく、新しい学校への不安もあった。そして何より、幼いころから一緒にいてくれた祖母と別れることが、寂しくて仕方なかった。

「転校したくないな……」と不安な気持ちを祖母にもらすと、祖母は、「K市のおうちは、今よりもっと大きくて、恵ちゃんの部屋もあるんだよ。それに、恵ちゃんなら、すぐに新しいお友達もできる。恵ちゃんは強い子だから大丈夫」と笑って言うてくれて、なんだかほつとしたことを、今でも鮮明に覚えている。

新しい家を見学する日がやってきた。新築の家は、とても大きく、私と弟には、六畳の子ども部屋がそれぞれ用意

された。今までアパートで暮していたため、すべてが新鮮で豪華に思え、二人ではしゃいだ。私たち家族四人は、私が生まれた時から父方の祖父母の家に三か月に一回のペースで遊びに行っており、父方の祖父母も、母方に負けず劣らず近い存在だった。

父方の祖父母の笑顔を見て、「一緒に暮らしたら、きつと毎日が楽しいだろうな」と思った。見学を終えH区のアパートに帰ってきた時には、不安や寂しさはすっかり消え、早く引っ越しをしたいと、わくわくしていた。家が新しく大きかったこと、そしてK市の祖父と祖母が優しいことなどを高田の祖母に報告すると、「よかったよかった」と優しく笑ってくれた。

引っ越し当日の朝、両親と近所の人が、家の家具や荷物をトラックに積んでいた。私と弟は、アパートの近くの公園で友達と遊び、出発までの時間をつぶしていた。友達は、「絶対遊びに行くからね」と言って、次々に小さなプレゼントをくれた。だから、寂しい別れにはならなかった。父が、「荷物が積み終わったらからもう行くよ」と私と弟を呼びに来た。父と母は近所の方々に「べこべこ」と頭をさげ、何度も何度もお礼を言っていた。私や弟もよく分からないまま頭を下げていた。

「おばあちゃんに何か言わなくちゃ」とずっと思っていたが、言うタイミングを逃し、結局、何も言えずに車に乗り込んでしまった。家族の荷物を載せたトラックが走り出す。父が、

「さあ出発」と言つて、エンジンをかける。皆が笑顔で手を振つている。「おばあちゃん、またね」と心の中で呟き、祖母を見た瞬間、私ははつとした。花咲くような笑顔の中で、祖母は一人、泣いていたのだった。

新しい生活

K市での生活が始まった。勉強机やベッド、本棚などが買そろえられ、生まれて初めての、自分の部屋ができた。私はよく、祖母とお菓子作りをした。栗きんとんの作り方を教わったのも、この時だ。祖父は日曜大工が趣味で、手作りの竹馬や竹トンボを作ってくれた。父と母は勤務先が遠くなり、通勤に時間がかかっていたが、それほど問題ではなかったようだ。

新しい学校は、H区の学校の四倍も大きく、遊具の数も、飼育動物の数も多かった。私はすぐに学校生活に馴染み、新しい友達もたくさんできた。近くの公民館で遊んだり、自慢の部屋に招いたり、毎日が楽しく、何もかもが順調だった。

しかし、そんな満ち足りた日々の中でも、高田の祖母のことがいつも気になっていた。今考えると、祖母には寂しい思いをさせたと思う。赤ん坊のころから、私と弟の面倒を見てきた祖母。私たちの世話が祖母の使命であり、生きがいであり、一番の楽しみだっただろう。電話を頻繁にかけていたら、祖母の寂しい気持ちも、少しはまぎれたはずだ。

が、そのころの私は、祖母のことが気になつていながらも、何をしたらいのかわからなかった。祖母を泣かせてしまった原因は、私ではないだろうかと思うと、怖かったのだ。いつも笑顔でいてくれた祖母の涙は衝撃的で、胸が苦しくなつた。

ある日、「新しいピアノ教室を見学しに行こう」と、母が言った。私は三歳のころからピアノを習っており、K市でも続けたいと母に言っていた。家から十五分ほど歩いたところに、ヤマハのピアノ教室があった。場所も先生もよかったのだが、コースが少なく、私も母も、納得できなかった。

高田から通っていたヤマハのピアノ教室は、五く六人で行うエレクトーンのコースで、友達と連弾をするというスタイルだった。私は連弾が好きで、毎年友達と衣装を合わせ、発表会に出ていた。これからどうするかを相談しながら、母と家に帰る途中、名案を思い付いた。

「週一回だけ、ピアノを習いに高田まで行く」

友達とエレクトーンを弾きたいということを一番の理由としてあげたが、それだけではなかった。週に一回、高田の祖母に会いに行くというのが、もう一つの目的だった。両親は、高田の祖母に対する私の気持ちを知っていたので、何も言わずに賛成してくれた。だが、一緒に住んでいる祖父母がこれを聞いたら悲しむかもしれないと思い、絶対に、口には出さなかった。

それから私と弟は、毎週火曜日、学校が終わり次第、母

と最寄りの駅へ直行し、名鉄電車に乗って高田へ向かった。ピアノ教室は六時ごろに終わり、そのあとすぐに、私たちは祖母のアパートへ向かった。祖母の手料理を食べながら、父の仕事が終わるのを待ち、父と一緒にK市へ帰った。

高田の祖母は、火曜日を心待ちにしており、近くのスーパーで、食べ切れないほどのアイスクリームやデザートを買って、いつも帰りに持たせてくれた。祖母の笑顔をまた見られるようになり、あの時見た涙のことは、私の心の中から消えていった。

そんな生活が二年ほど続き、私は四年生になった。一学期を終えるころ、父は、

「また名古屋へ帰ることになったよ」と言った。それは二度目の転校を意味していた。

私が四年生になったばかりのころ、家庭の中は少しずつ変化してきた。父と祖父が言い争うような声を頻繁に聞くようになり、家には暗い空気が流れていた。母は慣れないK市での生活や、父の両親に気を使う生活からのストレスで、体中に発疹ができていた。

「ごめんね、心配しなくて大丈夫だからね」と、父は言ったが、問題が起きていることは分かっていた。後々話を聞くと、祖父母が思う同居生活と、両親の理想の同居生活が異なり、そこからすれ違いが起きたそうだった。父はいつも、「大丈夫」と笑い、母も、「この発疹はなんでもないよ」と言っていた。祖父母も私や弟に優しく接し、誰もが、何事もな

いような顔をしていた。

だが、大人四人が部屋に集まり、祖父が怒鳴り声をあげたり、祖母が泣いたりする声は、同じ家に住んでいるのだから、確実に耳に入ってくる。私は常に家の中で大人の機嫌をとろうと、皆の顔色をうかがい、気を使いながら生活するようになった。

両親や、祖父母のどの顔が本物なのか、何が本当なのかわからなくなり、混乱していた。両親や祖父母に二つの顔があるようで、怖かった。そして「大丈夫」だなんて、嘘をつかないでと、イラついた。だが、そのイラつきを口にすれば、状況はさらに悪くなるだけだと、私にはわかっていった。子どもが苦しんでいるのを知ったら、きっと両親も祖父母も辛くなる。私がしなくてはいけないことは、笑顔でいることで、家での雰囲気をよくして、大人たちに仲直りをしてもらうことだけだった。

名古屋に帰ると言われたのは、そんな時だ。私の力ではどうにもならなかったんだと、私は悟った。これは決定事項であつて、私たちがどうこう言つて状態が変わることではないと、諦めた。

「パパの仕事の関係で、引っ越しするんだ」と、父は言ったが、そんな理由でないことは分かっていた。子どもを甘く見て、何も知らないでいると思つたら大間違いだ。しかし、思う一方、子ども扱いをされていることに腹がたつた。引っ越しをするということは転校をするということだ。なぜ、

親の勝手な都合で、仲の良い友達や好きだった男の子と引き離されなくちゃならないんだと、うんざりした。だが、私がここで怒ったら、両親がきつと悲しむ。私にできることは、「また新しい友達ができるなんて嬉しい」と、笑ってみせることだけだった。

何か月もの間、私は自分の心を押し込め、周りに気を使つて過ごしていた。私の心は、疲れきっていた。

「また高田のおばあちゃんのところに行けるね」と、母に言われたのだが、そのことさえ、自分の中で霞んでいた。引越しの当日、祖父はどうとう見送つてはくれなかった。祖母だけが泣いて、手を振っていた。大人の勝手さには腹がたっていたが、両親や祖父母の誰が悪いわけでもなく、仕方ないことなのだと思つた。私に接する時、みな優しくたため、誰のことも嫌いにはなれなかった。祖母の涙を見たとき、うまく言い表せない複雑な気持ちになつて、心がモヤモヤとしていた。

二度目の、新しい生活

四年生の二学期が始まるころ、I区のマンションに引越した。引越しの翌日から、新しい学校に登校した。転校することには慣れており、早くたくさん友達を作るためには、最初から明るくニコニコすることがコツだと、わかつていた。

転校初日から、すぐにいろいろな子と仲良くなり、友達がたくさんできた。成績もトップで、テストでは毎回高得点

を取った。もともと運動神経もよく、転校してすぐの運動会では、リレーの選手に選ばれた。今、I区の小学校の友達に当時の私の印象を聞くと、「勉強も運動も音楽もできて、性格も明るい、スパー転校生だった」と、言われる。だがそれと同時に必ず、「その後が、いろいろ大変だったよな」と、苦笑される。

反抗期

転校したばかりのころは、先生から見ても、親から見ても、理想的な子どもだった。学校ではすぐに人気者になり、クラスの中心的存在にもなった。バスケットボール部だけでなく、陸上部にも入部した。そのころから、部活や勉強が忙しくなり、高田の祖母の家に遊びに行く回数が減つていった。五年生に上がつて、クラスが変わつても、私は相変わらずクラスの中心的存在だったが、たつた一つ、気に入らないことがあつた。それは、担任のS先生だ。

S先生は、ずっと低学年のクラス担任をしていたのだが、その年は急に、五・六年生を担当することになった。その影響で、私たちをまるで低学年の生徒のように扱った。S先生に悪気がないことは分かっていたが、その時は、子ども扱いをされるのが本当に嫌だった。高学年ならわかるようなことも、一から丁寧に説明し、なにかにつけて、「できる？ できる？」と聞いてくる。算数の時間も、例をあげる時は、うさぎさんや、りんごだ。教科書には「Aさんが……」や、

「自転車か……」と書いてあるのに、S先生は、とにかく幼稚な言葉を選ぶ。S先生と話す度、両親や祖父母から受けた子ども扱いを思い出した。

それがだんだん鬱陶しくなり、私はS先生を見下し始めた。私だけではなく、他の生徒も同じだった。クラスを中心だった男子が、先生に反抗的な態度をとり、私もすぐに便乗した。反抗的な行為はさらにエスカレートし、授業中に、「つまらないから校庭で遊ぼう」と言って、ずるずると出ていってしまうなど、先生が困ることをたくさんした。そのうちに、学校から親に電話がかかってきた。母や父は、「先生に迷惑をかけて、何をしているんだ」と私を強く叱った。そんな両親にも腹が立ち、父や母とも頻繁に口喧嘩をするようになった。両親を困らせるようなことを言ったり、迷惑な行動を起こしたりもした。

「私は、もう子どもじゃない。こうやって、困らせることだってできるんだぞ」と思っていた。ずっと我慢をして、いい子を演じていた自分の奥にあった気持ち、一気に溢れ出した。私は両親の勝手な都合で嫌な思いをしたのに、両親に私を怒る権利があるのかと、いつも強気だった。そんなずるい大人が嫌いだった。

S先生だって、私たちを子どもだと思って、ニコニコしているが、その裏にどんな仮面をかぶっているのかわからないと思ひ、信じていなかった。そういう敵意は、大人だけに向いたものではなかった。クラスの中でいつも先生に従って、反抗

をする私たちを嫌な目で見る、一人の女の子にも向いた。「いい子ぶってる」

その子が嫌いでもなくなってきた。どうにかして困らせてやりたいという気持ちが強くなり、クラスの中心的存在になつていた私は、無視を始めた。男の子たちは、その子の机に油性ペンで落書きをして、女子はクスクスと笑った。そのことで先生や親に怒られても、「それがどうした」と反抗し続けた。私はイジメをしていたのだ。イジメというのは本当に怖いもので、一人の子をずっと標的にしていると、そのうちに飽きてくる。違う誰かをイジメたくなるのだ。

六年生になつても私の態度は変わらず、標的を次から次へと変え、先生や両親に対する反抗も、全く治まらなかった。誰を信じるわけでもなく、誰かを傷つけることで、自分は強いんだ、と自分に言い聞かせていた。裏を返せば、私の心は弱かった。両親や先生に「こういうことが嫌」とか「こういうことが寂しい」と口で言えず、こんな形でしか自分を表せなかった。その弱さをかき消すように、誰かを傷つけていた。

祖母の言葉

久しぶりに、高田の祖母の家に泊まった。いつものように「よく来たね」と笑って迎えてくれた。祖母は昔と変わらぬ味の、おいしい親子丼を作ってくれて、冷蔵庫を覗くと、食べ切れないほどのアイスクリームがどっさり買ってた。

困った気持ちになったが、とても温かかった。

「最近学校はどう？」と祖母に聞かれたが、何と言ったらいいかかわらず、「うん」と一度だけうなずいた。祖母の前で、「学校では先生やクラスメイトをいじめて、ママとパパを困らせています」とは、言えなかった。その日は祖母と好きなテレビを見て、好きな芸能人の話をして過ごした。私が寝る部屋はいつも決まっていて、私はいつものように布団を敷いた。

横になると、そこには見慣れた景色が広がっていた。頭上には古い蛍光灯、古くて茶色いクーラー、私が壁に落書きをしてしまった跡。私や弟、従兄たちの身長が刻まれた柱。昔と何も変わらないものがあって、いつも笑顔で迎えてくれる祖母がいた。何も変わらない場所の中になると、本当に落ち着いて、とげとげした気持ちが溶けるようだった。

私はただ単純に、寂しかったのだ。二度も引越した、昔から大切にしているおもちゃは引越しの度に処分され、新しい家になる度に、思い出のものや場所は無くなってしまふ。一緒に中学に行こうという友達との約束は、果たせずに終わり、「来年、僕の誕生日会に来てね」と好きだった男の子に言われ、楽しみにしていたのに、行けなくなってしまった。引越しの度に新しく塗り替えられる生活は、とても寂しかった。小さいころから何ひとつ変わらない、居心地のよい私の居場所は、祖母の家しかなかった。寂しいという、自分の中に眠っていた感情を見つけた時、とても切なくて、布団

の中で声を殺して泣いた。

次の朝、私が起きると、祖母が朝ごはんを準備してくれていた。ご飯と、かぼちゃ入りの赤だし、鮭の塩焼きに、卵焼きという定番メニューだったが、本当においしかった。そして、ママとパパにイライラしてしまうこと、学校では先生に反抗してしまうことを話した。私の中に眠っていた、寂しいという感情も、祖母にだけは隠さずに言えた。すると祖母は表情を変えずに話を聞き、「大人でも失敗をしようこととがあるんだよ。でも、それを責めてはいけない。強い人というのは、弱い人を守る人だ」と言った。

今まで「先生が悪いから反抗する」、「両親が何も分かってくれないから反抗する」と人を責めてばかりいた。責めるということに、罪の意識はなかったが、祖母に「人を責めてはいけない」と言われると、本当に悪いことをしているんだ、自分がしてきたことが間違っているのだと、初めて感じるこゝとができた。

私がじつと下を向いていると、「恵子は強い子だから大丈夫」と、祖母は言ってくれた。私は「強い人になりたい」と思った。「弱い人を守る強い人になりたい」と思った。それが祖母の願いでもあるような気がして、その期待に応えたかったからだ。動機なんて、その時は関係なかった。ただ大好きで、優しく包んでくれる祖母の期待に、応えたかった。

そのころから両親は、絶縁関係にあったK市の祖父母と、頻繁に連絡をとるようになっていた。I区に引越してきて

から、K市の家に遊びに行くことはなかったが、きつと父も母も、気持ちに整理が付き、もう一度、祖父母と向き合おうと決心したのだと思う。

母は電話をする前にとても緊張していたが、祖父母の体を気遣ったり、近況を報告したりと、関係を修復しようとして頑張っていた。同居は失敗に終わってしまったけれど、また関係を修復しようとお互いに努力している両親や祖父母を見て、すごいなと思った。相手を許すことや、関係を修復することは、とても労力や気力があることだからだ。両親や、先生、クラスメイトを傷つけ、それらの人たちとまた仲良くなろうと思うと、少し気が遠くなった。私が心を開いても、きつと皆は私を避けるだろう。それでも歩み寄り続けるのは、気力がある。そんな気力のいることに、両親は前向きに取り組み、乗り越えようとしていた。

S先生も、努力をしていた。生徒の好きなアイドルやファッションを勉強して、話しかけてくるようになった。最初は急に話しかけてきて、うっとうしいと思っていたが、何度もしつこく話かけてくるので、だんだん話すようになった。

両親やS先生が変わろうとしていることが、目に見えてわかった。大人でも失敗してしまうことはあるけど、努力して改善しようとしている点で、私はまだまだ追いつかないなと思った。

いつまでもふてくされたままでは、祖母が言っていた「人を守ることが出来る強い人間」にはなれない。照れくさい気

持ちを何とか抑え、両親やS先生と話す機会を、少しずつ増やしていった。時には両親や先生の言動にイラつき、反抗してしまう時もあったが、祖母の言葉を思い出して、「失敗してしまっても責めない」と心の中で復唱し、歩み寄ることを諦めなかった。

そうこうしている間に六年生も終わり、私は小学校を卒業した。S先生に私の気持ち伝わっていたかどうかは分からないが、卒業式の時、「いろいろとごめんさい、ありがとう」と私の手をぐっと握ってくれた。いじめてしまった人たちには、最後まで私から話しかけるなど、努力をしたが、いつも怯えた目で私を見ており、拒絶され続けた。自分がしてしまったことの罪の深さを、初めて知った。

変化

中学に上がると、今まで遅れていた勉強を取り戻すように、一生懸命机に向かった。バスケットボール部に所属し、毎日汗をかいた。部員同士、意見の食い違いが起きる時もあったが、私は常に仲介役になり、「失敗はしてしまうけど、仲間なんだから一緒に頑張ろう」と部員に言い聞かせた。

また、中学校一年生から三年生まで、生徒会の役員となり、盲導犬育成のためのチャリティー募金や、発展途上国への支援物資の活動など、弱い人たちを助ける活動に力を入れた。祖母の期待に応えたいがために始めたことだった

が、そのうち本当に、人を助けられる強い人間になりたいと思うようになった。それが友人にも伝わったのか、よく人から相談を持ち掛けられた。勉強のこと、部活のこと、恋愛のこと、どんな相談に対しても、失敗を責めず、「ここからどうするかが大切だよ」と伝えた。

祖母に教えてもらったことが、私の指針になっていた。人に頼りにされることが、こんなにも幸せなこととは、知らなかった。自分が存在する意味を、その時初めて見つけられた気がした。高校に入学した後も、その姿勢は変わらなかった。

進学校に入学したため、中学まではトップだった成績が、後ろから数えたほうが早いくらいまで落ちた。一時期、どうせ勉強しても成績はあがらないと勉強を投げ出した時があったが、自分がしてしまった失敗を見つめ、責めることはなく、次からどうするかが大切だと言いつ聞かせ、一生懸命頑張った。人の弱さを許すことを心がけている内に、自分の弱さも見つめて、これも自分だと認め、前向きに努力できるようになった。

高校二年生の時には、一〇〇名の部員を抱える吹奏楽部で部長を務めた。部員の悩みを親身に聞き、全力でサポートした。大好きな人の力になったり、助けてあげられることが、自分の存在理由になっていた。忙しさもあり、高田の祖母の家には、二か月に一回しか行けなかった。

そのころ、母方の祖父はガンに倒れ、闘病生活を送ってい

た。祖母や母たち兄弟全員で介護にあたっていたため、祖母は忙しそうにしていた。疲れている祖母に気を使わせてしまうと思い、遊びに行くのを控えた時もあった。

祖父は闘病生活の末、私の高校卒業の年に亡くなった。余命二か月と言われていたのだが、驚くことに二年も生き永らえた。もちろん悲しくはあったが、みんな口ぐちに、「おじいちゃんお疲れ様、よく頑張ったね」と言いつて微笑んだ。祖母は泣いてはいなかったが、寂しそうな顔をしていた。祖父と暮らしていた十階の部屋に、自分一人だけで住まなくてはいけなくなってしまうのだ。私は大学生になったら、どんなに忙しくても、祖母が寂しくないように、祖母の家に遊びに行こうと誓った。

大学入学

高校を卒業して、このH大学へ入学した。かつてからの夢だった留学をするために、留学制度の整っている大学を選んだ。高校時代、英語の成績は散々なものだったが、留学するチャンスを得るために、大学では真面目に英語を勉強した。

宿題にアルバイトと、とても忙しい日々を送っていたが、祖母の家には一か月に二回ほどのペースで通っていた。祖母に代わって掃除をしたり、洗濯物を干したりした。買い物に行った時には、祖母がしばらくの間、重いペットボトルを買って帰らなくてもいいようにと、お茶や水、合計六本を買い

溜めした。祖母は、

「忙しいんだから、無理してこなくていいよ」と言っていたが、祖母という時間は私にとって癒しであり、特別な時間だったので、いつも「来たいから来ているだけだよ」と、答えた。弟も絶品井料理を求めて、祖母の家によく出入りしていた。祖母は、弟がガツガツとかつ井を食べている姿を見て笑っていた。

大学二年生の時、ついに私は留学の切符を手にした。祖母は私が留学に行くこと、そして将来は航空関係の仕事に就くという夢を応援してくれていた。

「外国なんて知らないところに行っても大丈夫か？」としきりに心配をしていた祖母だったが、

「恵子は強い子だから、大丈夫だね」と自分に言い聞かせているようだった。

最後の姿、最後の声

アメリカへ行く日の朝、父と母と一緒に、祖母の家に行った。留学する前に、どうしても祖母に会いたかった。祖母はいつもの笑顔で私を迎え、祖母特製のかぼちやの赤だしを出してくれた。この赤だしを七か月間食べられないと思った私は、おかわりをして、味をかみしめるように飲んだ。

そして出発の時間、

「恵ちゃん、頑張りなさいね」と言って背中を数回トントンと叩いてくれた。祖母はアパートの前の駐車場まで出てきて、

見送ってくれた。父が車のエンジンをかけ、ゆつくりと発車した。私は窓を開け、「いつてきます！」と元気に挨拶をし、祖母に手を振った。祖母はいつもの笑顔で、ずっと手を振ってくれた。それが、私が最後に見た祖母の姿だった。

アメリカでは毎日新しい発見があり、英語はもちろん、たくさんのお話を吸収した。祖母が一番心配していた食べ物についても、ホストファミリーのことも、健康面のことも、何も問題はなかった。特にホストファミリーは、本当にいい人たちだった。七十歳のホストグランマは、いつも優しい笑顔で包みこんでくれる人で、祖母に似ていた。

アメリカに着いて二か月、ようやく国際電話のかけ方もわかってきたので、高田の祖母に電話をかけることにした。時差のことを考えて、学校の授業が終わった後、誰もいないロビーに座り電話をかけた。電話の向こうには、いつもと変わらない「もしもし」という声が聞こえた。

「恵子だよ、今アメリカからかけているよ」というと、祖母は飛び上がるような声を出して、驚いていた。

「アメリカはどう？ 気温は寒くない？ ご飯はおいしい？ ホストファミリーはいい人？ 体調悪くない？」と質問攻めにあつた。きっと私が出発してから、ずっと気がかりだったのだろう。

「何も問題なく、楽しく毎日過ごしているよ」と説明すると、ほっとしたようだった。それから三十分間いろいろな話をした。祖母も、「体調も良く、何も変わらないよ」と言っ

て、私も安心した。祖母は何度も、

「恵子は強い子だからどこへ行つても大丈夫だね」と私を励ますように、繰り返し返した。そして最後は、

「国際電話つてお金高いんでしょ？ もう切つていいよ」とお金のことも気遣つてくれて、何とも祖母らしいなと思った。

「半年後には日本に帰るから、風邪ひかないで待つてね」と言うのと、祖母は、

「ハイハイ！」と明るい声で返事をしてくれた。それが、私と祖母の、最後の会話になった。

アメリカの生活に慣れると、楽しさはどんどん増した。最後の三か月間は日本にいる家族のことなど忘れてしまう

くらい、毎日が充実していた。帰国まであと三週間に迫ったある日、母から一通のメールが届いた。

「元気にしていますか？ おばあちゃんが恵子に会えるのを今か今かと待つています。おばあちゃんに伝えるので、何かメッセージがあつたらください」

「といった内容だった。「メッセージ？」と不思議に思いながらも、

「おばあちゃん、私はあと一か月で日本に帰ります。帰つてきた次の日におばあちゃんに会いに行くから、待つてね」

とメールを打ち、母に返信をした。

祖母の死

十二時間のフライトの末、日本時間の四月五日夜二十

時ごろに、中部国際空港に到着した。両親と弟が出迎えてくれて、久し振りにみる笑顔に、ほっとひと息ついた。私が食べたかった寿司や手羽先を買つて家に帰り、久し振りに家族四人で食事をし、土産話に花が咲いた。

「明日、おばあちゃんのアパートに行こうね」と言つて、早めの眠りについた。

朝起きて、リビングに行き、寝ぼけながらもテーブルの椅子に座ると、両親が私の前に座り、顔を強張らせていた。何かただごとじゃないことが起きたのだと、その顔を見れば一目でわかり、眠気も覚めた。私が、

「どうした？」と聞くと、しばらくの沈黙の末、父が重い口を開き、

「実はね、高田のおばあちゃんが先月の十七日に亡くなったんだ」と言った。母は父がその言葉を言い終えて、すぐに泣きだした。私は父の口から発せられた言葉について、頭をフル回転させて考えたが、意味がよくわからなかった。祖母の心臓が止まつて、息が止まつて、冷たくなつて、そして二度と起きることのない、人間の最期の状態になっているのだと、生物学上の理論で解釈することはできた。しかし、私の最愛の優しい祖母が、もうこの世にはいなくて、私は二度と会うことができない、と考えると、意味がわからなかった。今、一体何が起つているのか、わからなくなつていた。

母は祖母が病に倒れて亡くなるまでの経緯を、泣きながら話した。祖母は二月の半ばに倒れ、運ばれた病院で肺ガ

ンが見つかったそうさ。両親や親戚はショックを受けたが、一般的にお年寄りのガンの進行は遅いと聞き、私がアメリカから帰ってくるまではもつ、と思っていたそうさ。

しかし、病状はよくならなかった。足や顔のむくみはなかなか取れず、検査をしてみたら、腸が破れて、体中に膿がたまっている状態だったそうさ。手のほどこしようがない状態だったらしい。母や母の兄弟、私の弟や従兄が交代で、二四時間看病をしていたが、初めに倒れてからたった一か月で、この世を去ってしまった。母から私に、

「おばあちゃんにメッセージをください」というメールが届いた日の朝に祖母は亡くなり、私が送り返したメッセージをパソコンで大きくプリントアウトして、棺桶の中に入れたそうさ。様々な話を聞いて、祖母が亡くなったということが、ようやくわかった。

もう祖母の手料理が食べられない、優しい笑顔に会うことも、アメリカでの思い出を話すこともできないとわかった瞬間、私は泣き崩れた。

その日から、私の中の何かが壊れ、世界が変わった。「おばあちゃんが苦しんでいる時、私は何をしていたのだろう。なぜ誰も教えてくれなかったのだろう」、それが一番初めに浮かんだことだった。帰国する三週間前くらいは、ちょうどアメリカでできた友達が、私たちのためにお別れパーティーを開いてくれたり、みんなで夜な夜な飲みに行ったりしていた。私は祖母が苦しんでいる時、亡くなった時に、のんきに

友達と騒いで、お酒を飲んでいたのではないか、と思った。

自分を責められずにはいられなかった。「なぜ気がつかなかったのだろう。なぜ、もつと頻繁に電話をしなかったのだろう。そもそも何で私は留学なんてしてしまったのだろう。最愛の祖母の最期に一緒にいてあげられないなんて、なんておばあちゃん不幸な孫なんだろう」と、毎日考えた。母は、

「おばあちゃんは、恵子がもうすぐ帰ってくるっていうのを糧にして、最後まで頑張っていたよ」と教えてくれたが、私はなぜ、もつと早く帰って来ることができなかったのだろうと、自分を責め続けた。

そして、どうして誰も教えてくれなかったのかと、他人を責めた。両親、弟、叔母さんや叔父さん、従兄、親戚全員が、私には教えてくれなかった。両親の判断で、私には黙っておくことになっていたそうさ。私が祖母の病気や死を知ったら、アメリカでの生活を切り上げて帰ってきてしまう可能性が高いと思っただけだ。「アメリカで、最後まで楽しい生活を送ってほしい」、それは祖母の望みでもあると、皆が思っていたそうさ。確かに、祖母の最期に立ち会って、祖母のそばにいられるのなら、アメリカでの生活を捨てて、私は日本に帰っていた。最後まで楽しい留学生活を送ってほしいという家族や親戚、そして祖母の願いや優しさは理解できた。だが、私はどうしても祖母の最期に立ち会って、今までのお礼やお別れを言いたかった。第二の母であり、私を救ってく

れた祖母に、一目でも会いたかった。

大学での授業が始まり、多くの友達が、

「おかえり！ 留学楽しかった？」と、笑顔で聞いてきた。私はそんな精神状態の中でも笑顔を崩さず、思いつくことを語った。だが、家に帰ってくると、とたんに祖母のことを思い出し、自分を責めて一人部屋で泣く生活を続けていた。私は留学に行ったことすら、後悔し始めていた。祖母が亡くなると知っていたら、留学には絶対に行かなかった。十一月に電話をした時は、まだ病気に倒れる前であり、とても元気だった。祖母の死は、誰もが予想もなかったことであり、予測不可能だった。だが、祖母が亡くなる時に海外留学に行っているという自分の運命さえ、憎く思えた。

私は昔から、海外に興味があった。将来は航空業界に就職したいという夢があり、英語を学ぶ必要性を感じていたからこそ、留学した。航空の仕事の中でも、キャビン・アテンダントになって世界中を飛び回ることに、強い憧れがあった。

だが、その夢さえ捨ててしまおうと、本気で思った。世界中を飛び回っているのは、大切な人に何かがあった時に駆けつけられない。また今と同じ思いをして、苦しむことになる。

大切な人の傍で、大切な人を守ることに自分の価値や存在理由を見出していた私は、それができない職業ならば、目指す価値はない、と思った。祖母を助けてあげたり、少しでも気持ちを楽にさせてあげたりすることができなかった。

た自分の無力さに、ただ呆然とするしかなかった。何のために自分が存在しているのか、わからなくなつた。

祖母が人を守るこの意味を私に教えてくれたのに、私はなぜ、そんな大切なことを教えてくれた祖母を守れなかったのだろうか、本当に情けなく思つた。

祖母の最後の優しさ

半年間、自分を責め続ける日々が続いた。付き合っていた彼と買い物に行く時、彼はよく高田のアパートの前を通つたが、私はその度に「わっ」と声をあげ泣いてしまうような精神状態だった。その道を避けるように運転してもらおうなど、彼にも気を使わせていた。そんな私の状態を見て、誰より心配していたのは両親だった。

ある日、母と二人で夕飯を食べていると、母が急に、

「恵子はおばあちゃんの看病に耐えることができたかな」と言った。急に発せられた言葉に驚いて、どういふことか聞いてみた。すると、母は祖母を看病していた時のことを語ってくれた。一か月前まで元気だった祖母は、急に倒れて以来、変わり果てた姿になったそう。顔色は黒くなり、足や手はむくんで膨張し、優しかった顔は痛みで歪み、痛みがひどい時は、一日中うめき声をあげていたらしい。母や叔母たちは、見ているのが本当に辛かったのだと言われた。そして母は、「おばあちゃんが恵子のいない間に亡くなったのは、きっと恵子にだけには、あんな姿見せたくなかったからじゃな

いかな」と言った。確かに私は、祖母のそんな姿を見たら、精神的に病んでしまったかもしれない。

「おばあちゃん、何で私を待っていてくれなかったの？」と何度も何度も心の中で繰り返していたが、私を待たずして亡くなったのは、私に対する、祖母の最後の優しさだったのかもしれない。きつとそうに違いない。母は、祖母が入院している病院で、「恵子が悲しむから、お願いだから元気になってね」と祖母に言ったらしい。すると祖母は、「恵子は強い子だから大丈夫」と笑っていたと、私に教えてくれた。祖母の優しさが、温かさが、そこには溢れていた。私はそんな祖母の愛が嬉しくて、恋しくて、夕飯を食べながら泣いた。

それからは、自分を責めるのをやめた。なぜなら、私が自分を責めていることを知ったら、きつと祖母は悲しむだろうと思ったからだ。最後に祖母が残してくれた優しさをきちんと受け止め、自分を責めるのではなく、祖母に感謝しようという気持ちに変化したのだ。

誰よりも、留学の成功や、私の夢を応援してくれていた祖母のために、もう一度、夢に向かって頑張ってみようと思った。もしも、大切な人のそばにいられずに守れなかったとしても、「あなたをこんなにも愛している」という気持ちだけは、きつと届くだろう、と思えるようになった。

それから私は、夢を応援してくれた祖母のために、家族のために、自分のために、航空業界での仕事を目指して、一生懸命努力した。今までにないくらい頑張った。惜しくも

航空業界での仕事には就けなかったが、あれだけ努力をしたのだから、もう思い残すことはない。

最後に

祖母の口癖だった「恵子は強いから大丈夫」という言葉が今、心に響く。どんな困難なことがあっても、必ず私なら乗り越えられると、祖母は今も昔も、変わらず信じ続けているだろう。祖母の死も、きつと乗り越えられると、祖母は信じていただろう。

私は祖母の期待に応えるためにも、この先どんな困難が待っているかと、前を向いて進みつづけようと思う。そして、「弱い人を守る強い人である」ことは、今もこれからも私の目標であり続けるだろう。前向きに生きること、そして愛する人と自分を大切にすること、これが私らしく生きるということだと、祖母の死によって学んだ。

自分史的エッセイを書き始めてから、不思議なことがあった。祖母が亡くなってからというもの、祖母の夢を一度も見ることがなかった。写真で見る祖母はいつもおめかしをしていて、私はそんな祖母も素敵だと思いが、普段着でおいしいご飯を作ってくれる祖母の姿が一番好きだった。そんな祖母にはもう会えないと思っていた。

しかし、つい二日前、七月一四日の、二十二歳の誕生日。その朝、今まで一度も夢に出てこなかった祖母が、急に夢に出てきたのだ。そして、「誕生日と、就職おめでとう」と言う

て、小さくて綺麗な箱をプレゼントしてくれた。あのアパートの十階の部屋で、昔から変わらない場所の中にいつも通りの普段着で、いつも通りの笑顔の祖母がいた。

夢から覚めた瞬間、祖母に呼ばれているような気がして、祖母の仏壇に手を合わせに行こうと決めた。自宅で家族と誕生日会をやる予定だったのだが、わがままを言って、祖母のアパートの部屋で、誕生日会をしてもらった。単なる偶然かもしれないが、私にとっては、本当に意味のある一日となった。